

ニーチェの格言に学ぶ

高き人間を作るのは、高き感覚の強度ではなく、持続である。

フリードリヒ・ヴィルヘルム・ニーチェ

今月は、実存主義の代表的な哲学者の一人であるフリードリヒ・ヴィルヘルム・ニーチェ(Friedrich Wilhelm Nietzsche, 1844年－1900年)の言葉を取り上げてみました。ニーチェの思想は、アフォリズム(ときに例え話や比喩などを用いながら、簡潔な表現で人の生き方などを表現した言葉や文のこと)で表現されていることが多く、これもその一つであると言えます。出典は、「善悪の彼岸」(中山元訳光文社)ですが、余談ながら、この光文社版は、和訳がこなれていて比較的読みやすいと思います。

冒頭の言葉ですが、おそらくニーチェのいう「超人」という観念と関りがあると思われるのですが、門外漢である私には、哲学的なことを語る能力はなく、この言葉も、あくまで私なりの解釈により、日々の生活や仕事のヒントとして、お話ししたいと思います。

人は、その内容は様々でしょうが、それぞれの夢や理想あるいは志のようなものを持って生きているのではないかと思います。その気持ちや思いの強さは、とても大事なものだと思いますが、ニーチェは、夢などを実現するのは、その思いや感度だけではだめで、それを持続することが重要であると説いているのだと思います。また、相対性理論で有名なアルベルト・アインシュタインは、「天才とは努力し続ける力である」と述べていますし、発明家のトーマス・エジソンは、「天才とは、1%のひらめきと99%の努力である」と述べたと言われています。アインシュタインやエジソンのような天才と呼ばれる人々でも、その才能に奢ることなく、努力し続けようとした姿勢には頭が下がります。彼らのような「天才」や「偉人」でなくても、何か一つのことをやり続けた人には、たとえ無名の市井の方であっても、何かしら滲み出るような魅力を持っているように感じます。人格というものは、犯罪など反社会的な行為などを除き、どのようなものであれ、「持続」することによって、磨かれていくものなのでしょう。

さて、同書から、もう一つニーチェの言葉をご紹介します。それは、「才能をもつだけでは十分ではない。諸君から才能をもっていることを認めてもらわなければならないのだ」というものです。人は、誰でも多少とも自尊心やプライドがあります。自分には、才能や能力があると思うのは決して悪いことではありませんし、自分を信じることも成功の鍵の一つであると思います。しかし、根拠なく膨張した自尊心やプライドは、結局は自らを傷つけることにも繋がりがかねません。このニーチェの言葉にあるように、才能は他者に認められて初めて花開くものなのでしょう。

それでは、どうすれば他者から認めてもらえるのかといえば、上に述べた「持続」の話とも関係しますが、結局日々の地道な積み重ねでしかないと思います。いくら自分には才能等があると思っていても、家族や友人等は別として、その人に対する社会や組織における評価は、最終的には、その人のこれまでの実績や経歴でしか押し量れません。特に、組織における評価は、どのようなことを、どのくらい継続的に行ってきたのか、そしてどのような実績や成果を残したのかということが、基本的な評価軸となり、それを決定するのは、自己ではなく上位者等の他者であるということを、心に留めておくことが、組織の中で仕事をする上で大事なことだと思われま

令和8年(2026年)2月



一般財団法人 かながわ水・エネルギーサービス
理事長 松井 聡 明